



Title	日系アメリカ人4世のライフストーリー：日本語学習とエスニック・アイデンティティに着目して
Author(s)	中橋, 真穂
Citation	大阪大学言語文化学. 2012, 21, p. 43-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77782
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日系アメリカ人4世のライフストーリー

—日本語学習とエスニック・アイデンティティに着目して—*

中橋 真穂**

キーワード：日系アメリカ人4世、日本語学習、エスニック・アイデンティティ

Over 100 years have passed since Japanese first moved to the United States. Nowadays, the ties between Japanese-Americans and Japan have gradually faded after the change of generations, which is said to have created more of an overall Asian-American awareness (Lucas 2004). In such a situation, there are some Japanese-Americans who study Japanese language as a means of “looking for their roots”.

Takezawa (1994) mentioned that Japanese-Americans consider Japanese language as one of the most important cultural markers that define the Japanese and it is said to be an important element of ethnic identity formation. Based on this information it can be established that their identity as Japanese-Americans and learning Japanese language are closely related.

In this study I conducted interviews of two fourth-generation Japanese-Americans who study Japanese language at a university in California. I discussed three points pertaining to their life stories: the surrounding environment and identity of the fourth-generation Japanese-Americans, the relationship between their identities and language learning, and the changes of their surrounding environment and identities through learning Japanese.

From my research I have cleared up the complex situation for young 4th generation Japanese-Americans in regards to their conflicting Japanese and American identities, which is a subject that has previously had relatively little research. My research was conducted through the point of view of the interviewees, and will help to give an authentic and better understanding of the subject matter.

* Life Stories of 4th Generation Japanese Americans:

Focused on Japanese Language Learning and Identities (Maho NAKAHASHI)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

1 はじめに

日本人がアメリカ合衆国へ渡ってから100年以上経った現在、日系アメリカ人は、世代交代を経て次第に日本とのつながりが薄れ、アジア系アメリカ人化しているといわれている（ルークス 2004）。そういったなか、「自分のルーツ探し」として大学などで日本語を学習する日系アメリカ人も少なくない。「日系アメリカ人は日本語を日本人と定義する最も重要な文化的マーカーの一つとして位置付けているので、これはかれらの日系としてのエスニック・アイデンティティ形成に重要な要素を占める（竹沢 1994, p.227）」ということからも、日系アメリカ人としてのエスニック・アイデンティティと日本語学習は密接に関係していると考えられる。

そこで本研究では、カリフォルニア州にあるS大学で日本語を学習する2人の日系アメリカ人4世に対してインタビューを実施し、周辺環境やエスニック・アイデンティティ、彼らのエスニック・アイデンティティと日本語学習との関係、さらに、日本語学習を通じた周辺環境やエスニック・アイデンティティの変化の3点を中心にライフストーリーから考察する。そしてそこから、まだ比較的研究や報告の少ない日系アメリカ人4世の日本とアメリカの間で揺れる複雑な実態を彼らの視点から明らかにし、理解を深める。

2 日系アメリカ人の歴史的背景

日本人がアメリカへ官約労働移民として渡ったのは、今から約130年前の1880年頃に遡る。彼らは過酷な労働条件のもと懸命に働き、家庭を築き、1920年には、約11万の日本人がアメリカ本土に住むまでになる（森茂 1999）。第2次世界大戦時には1世と、アメリカで生まれ、アメリカ市民権を有する2世が強制収容所に送られた。戦後もゼロからの出発となるなど困難な状況下で、一般的には日本人であることを隠し、子供には英語を話させ、アメリカ社会に「同化」させることで社会進出を図った。その結果、今日では社会的地位が確立し、「成功したマイノリティ」と称されることが多い（森茂 1999）。一方で、日本文化や日本語の継承は盛んではなく、多くの3世は日本語を話さない。さらに、外婚¹が進んでいるなど、日系アメリカ人のアジア系アメリカ人化が指摘されている（ルークス 2004）。また、戦後の日本企業のアメリカ進出にともない、移住した者も緩やかではあるが増加している。そのような人々を通常、新1世という。

3 先行研究と課題

日系アメリカ人に関する研究は今日に至るまで数多く行われてきた。竹沢（1994）は、

¹ 日系以外のエスニック集団に属する人との結婚（飯野 2000）。

強制収容と補償運動が日系アメリカ人のエスニック・アイデンティティに与えた影響について研究し、彼らが過去の経験を振り返ることで、エスニシティの変遷、再構築がなされたと指摘している。飯野（2000）は、日米貿易摩擦による「日本たたき」が与えた日系アメリカ人への打撃を取り上げ、強制収容所での苦悩ではなかったことを指摘している。また、1～3世に渡る世代間のエスニック・アイデンティティの変容についての調査も実施されている（江淵 2002）。

しかし、これらの研究の多くが1～3世に関するものであり、それに比べ4世以降に関する研究はまだ少ないといえる。竹沢（1994）が、日系アメリカ人は世代によって特徴が大きく異なると指摘しているように、1880年頃アメリカへ渡った1世と、本研究の調査協力者である4世ではエスニック・アイデンティティ、使用言語、文化など様々な点で異なるといえる。また、外婚が進み、各文化集団の持つ伝統的な文化が必ずしも次世代に受け継がれなくなっているアメリカの現状を考えると、各集団の価値観や行動特性を学ぶ意義は大きい（森茂 1999）。

そこで、若い世代の日系アメリカ人の周辺環境やエスニック・アイデンティティを彼らの視点から明らかにし、理解を深めることを目的として、S大学で日本語クラスを受講した日系アメリカ人4世2人に対しインタビューを実施し、ライフストーリーから分析を行った。前述したように、日本語は日系アメリカ人にとって日本人と定義する文化的マーカーであり、エスニック・アイデンティティ形成の重要な要素を占める（竹沢 1994）ことから、研究課題は「日本語学習とエスニック・アイデンティティ」に着目した内容を中心にした以下の3点である。

- (1) 日系アメリカ人4世の、周辺環境やエスニック・アイデンティティはどのようなものか。
- (2) 日本語学習とエスニック・アイデンティティは、どういった関係があるのか。
- (3) 日系アメリカ人4世の、周辺環境やエスニック・アイデンティティが、日本語学習を通してどのように変化していったのか。

4 調査の概要

4.1 調査方法

羅（2005）は、質的研究について、日常生活におけるルーティーンや問題点、或いは社会、個人、特定の集団における諸問題などを、当事者自身の視点で解釈することを重視し、それを時間的・地域的な特殊性の中で理解したうえで詳細に描写し、把握することだと捉えており、「物語」という概念の重要性を指摘している。また、桜井（2002）は、

ライフストーリーの全体的様相は、個人、歴史的な時間の中で変化し進化していく社会関係の複雑な網の目の中にある独自の実在であることを強調する点で、他の質的調査法とは大きく異なっていると述べている。本研究の調査協力者である日系アメリカ人4世の周辺環境やエスニック・アイデンティティなどは、本人の視点から具体的に語られてこそ明らかになるものであるといえる。またそれを詳細に描写し「物語」とすることで全体的な流れや枠を掴むことができると考える。さらに桜井（2002）は、従属的で抑圧された人達の言葉を本人の口から語ってもらった時、彼らの文化理解を促すだけでなく彼らの力ともなりうるという点で、マイノリティや被差別者を調査するのに適していると述べている。本研究の場合、世代が移り変わり日系からアジア系になりつつあるという考えもある今、日系アメリカ人4世の「声」を伝える手段としてこの研究方法は適切であると考えられる。

4. 2 調査の実施

本研究では、カリフォルニア州にあるS大学で日本語クラスを受講した経験のある日系アメリカ人4世の大学生2人を対象に調査を行った。調査協力者に自由に語ってもらうことを優先するため詳細な質問は事前に立てず、前述した研究課題を中心に英語で半構造化インタビューを実施した。調査時期は2009年3、8、10月の合計3回であり、調査協力者のプロフィールは表1の通りである。

表1 調査協力者のプロフィール

名前（仮名）	エスニシティ	ナショナルリティ	年齢 / 性別	専攻
クリス	日系	アメリカ	23 / 男	政治学
エイミー	日系	アメリカ	20 / 女	国際関係学

5 調査結果の分析

本研究では、録音したインタビュー内容を文字化、翻訳し、内容によって細分化した。その後、カテゴリーごとに分析、内容を忠実に再構築したものをストーリーとし再度分析を行った。以下、「周辺環境」「日本語学習動機と日本語学習を通して変化したネットワーク・意識」「世代間の違い」「日系アメリカ人のアジア系アメリカ人化」の4つのカテゴリーを各人のストーリー、分析の順に提示する。なお、ストーリーの下線部は分析に関連する部分を示している。「」内は協力者が英語で発言したものを和訳したものであり、日本語での発言は「日本語」のように斜体で表記した。

5. 1 周辺環境

はじめに、2人が幼少期からどのように日本文化、日本語と関わってきたかを紹介し、4世である2人の置かれた周辺環境を明らかにする。

5. 1. 1 クリス

(インタビュー：2009年3月、8月)

クリスは、カリフォルニア州の北部で生まれ育った。「アメリカ化した世代(3世)の子供として、自分も日本人だと意識せずに育った。意識せずに、とは恥だと思ったり、隠したりすることとは違い、日本人の血を誇りに思うのではなくて、ただ(日本人の血を)特別に思っていなかった。だが、最近では日本車やアニメなど日本の活躍を誇りに思うようになった。」

一方で「祖父母の話す日本語を日常的に耳にしていた。また、祖父母の家には兜などが飾ってあり、とても和風だった。毎年、地域で開かれる盆祭りにも参加するなど幼少期から自然と日本文化に接する機会があった。」

家庭外では「日本語学校に行くこともなく、意識して日本人や日系人と特に行動を共にすることもなかった。大学入学後も日本語クラスを受講するまでは、友達の中心は中国系アメリカ人だった。」

成長過程で日本人であることを意識しておらず、1～3世に見られる恥の意識(竹沢1994)などのマイナスの感情も抱いていないことから、日系人としてのエスニック・アイデンティティが構築されていない状態だったと考えられる。そういったなか、彦坂(1997)が、日本経済の隆盛などに刺激されて日本文化・社会への興味が内外からおこり、若い世代でのエスニシティの再認識がみられると述べているように、クリスにとっても日本の活躍が日本を意識させるきっかけとなったといえよう。

家庭内では、祖父母の影響で日本語や日本文化に触れる機会があったが、家庭外では1～3世に見られるような日系人同士の強いつながりはみられず、友達の中心は中国系という語りからアジア系アメリカ人化が観察される。

5. 1. 2 エイミー

(インタビュー：2009年10月)

エイミーはカリフォルニア州南部の日系人が多い街で生まれ育った。「幼い頃は日系コミュニティセンターの役員だった父親の影響で、センターで開かれる日本行事、

例えば餅つき大会に参加するなど日本文化が身近にあった。」

大学入学後も、「ここ（S大学）には自分が想像していた以上に日系人や日本人がいて、日本語を話す日系アメリカ人新1世、2世も多い」と感じている。また、S大学の日系コミュニティと太鼓サークルにも所属し、そこで知り合った彼氏（日系アメリカ人新1世）がいる。

竹沢（1994）によると、3世は1、2世に比べて行動様式等がアメリカ化した一方で、家庭内やコミュニティでは日本文化に触れる機会も多いとしている。エイミーの語りからも同様のことが観察され、家庭外で日系同士のつながりがあまりないと語ったクリスと異なることから、長い移民の歴史において、コミュニティ所属の有無が文化継承やネットワーク維持の度合いに大きく影響しているといえる。さらに、比較的移民の歴史が浅い新1世の存在も日本語、日本文化に触れる機会を与える重要な要素であるといえよう。

5. 2 日本語学習動機と日本語学習を通して変化したネットワーク・意識

次に、2人がなぜ日本語を学習し始めたのか、その学習動機について語られた部分を取り上げ、日系人としてのエスニック・アイデンティティと日本語学習との関係性を考察する。さらに、日本語学習を通じた交友関係や、意識の変化を明らかにする。

5. 2. 1 クリス

（インタビュー：2009年3月、8月）

「なんとなく興味があり、視野を広げたかった」ため、大学2年生で日本語クラスを受講する。受講を通して日本語だけでなく日本文化体験、日本人との交流を経験しある学生（新1世）と特に仲良くなり、「悪い日本語（スラング）」を学んだりした。

「視野を広げたいと思って日本語を勉強しましたが、段々日本人と遊ぶことの方が楽しくなった。友達と（日本語で）もっと話したい、知りたいと思った。そして、そういった関わりを通して、自分には日本人の血が流れているという意識が以前より強くなった。」

「日本語学習は日本文化や習慣とつながる一番の手段である。他にも色々な言語を学びたいが、流暢に話せるようになりたいのは日本語だけ。自分の言語だから。」

一方で、「日系以外のアメリカ人の友達といるとき、自分はアメリカ人になる。」

Kinginger（2004）は、あるネットワークへのアクセスの可能性やそこでの疎外感が、

学習者のアイデンティティの（再）構築に大きな影響を与えていると指摘している。クリスの場合も、日本語学習開始当初は日系人としてのエスニック・アイデンティティと日本語の関係性は明らかではないが、日本語クラスの受講をきっかけに日本人と関わるようになるなどネットワークが変化し、それにより日系人としてのエスニック・アイデンティティが構築される。そして、日本語はやがてコミュニケーション手段、そのネットワークに入る手段に変わっていく。さらに、ネットワークに属することでエスニック意識がより高まるといった、互いへの影響も考えられる。また、日本語は「自分の言語」であり、日本文化や習慣とつながる「一番の手段」としていることから、竹沢（1994）が指摘しているように、日本語は文化的マーカーであり、日系人としてのエスニック・アイデンティティ形成の重要な要素となっているということがクリスの語りからも伝わってくる。

さらに、相手に応じてアメリカ人になるというクリスの行動は、Takaki（1990）が、3世が「アメリカ主流文化」と「日系人の文化」の2つの「用具文化」を持ち、環境によって使い分けると指摘している部分と一致するといえる。

5. 2. 2 エイミー

（インタビュー：2009年10月）

5.1で述べたように、エイミーは幼い頃から比較的、日本文化や日本語に囲まれて生活してきたため、「日本語をすごく勉強したかった。それはごく自然の感情だった」と振り返る。S大学入学後、日本語クラスを受講した理由は第1に「日系アメリカ人である自分にとって日本語は自分の言語であり、流暢になりたいから。」第2に、「彼氏が日本語で日本人の友達と話す際、よく疎外感を覚えたから、いつか彼や彼の友達と日本語で会話できるようになるため」と説明した。

日本語受講後、「日本語だけでなく、授業で知った日本文化や風習の中には全然知らないものもあり、時々驚かされた。おもしろい発見だった」と振り返り、自分が知っている日本文化は「1, 2, 3世と受け継がれていくなかで次第にアメリカ化された日本文化かもしれない。ちょうど私（アメリカ化された日本人）のようだ」と語った。

エイミーにとって日本語は「自分の言語」という語りから、クリスと同様に日系人としてのエスニック・アイデンティティが日本語学習動機の1因といえる。また、彼氏や友人の会話を理解しその成員となることがもう1つの要因であるといえ、クリスとは違い、すでに日本人ネットワークに属し、日本文化や日本語と接する機会の多いエイミーにとって日本語学習はより実質的な意味をも含んでいるといえる。

自分の知っている日本文化や自分自身を「アメリカ化された日本文化やアメリカ化された日本人」として捉えている点については、竹沢（1993）が指摘しているように、長い移民の歴史を経て彼らの自己・他者意識も大きく変容し、現代の日本人とは異なる「日系アメリカ人」としての独自の世界観を築いていると捉えられる。江淵（2002）もまた、「日本文化」と呼ばれているもの自体が実は日本文化とは異質の要素を含んでおり、端的に言えばアメリカ的「文化の構造」と規定され、その枠内ではじめて「日本文化」足り得ている“現地化された日本文化”であるとしている。

5. 3 世代間の違い

100年以上の歴史を持つ日系アメリカ人は、世代によって意識や行動の特徴が異なることが指摘されている（森茂 1999）。2人のストーリーからも、彼らの両親である3世と意識や行動において異なる点がみられた。ここでは、それが端的に表れている2人の語りの部分を取り上げ、考察する。

「自分のルーツとしての日本に憧れを抱いて仕方がない。今までの人生に、（日本）文化が欠けていたことが原因なのだと思う。親の育て方に異議はないが、本当に、日本人であるという事実が、自分の人生にほとんどないんだ。その部分が自分を未完成にしているように思う。それを埋めるために、今、日本語を勉強している。」

（クリス：2009年10月より抜粋）

「（幼い頃）両親が日本語学習を強制してくれればよかったのに。」

（エイミー：2009年10月より抜粋）

彼らの語りから、2人とも両親に日本語や日本文化に接する機会を与えてほしかったと思っていることが分かる。3世以前とは違い日系であることを恥と感せず、むしろ日本とのつながりを探求しているといえるが、この世代間の日本に対する考え方の差はなぜ生まれたのだろうか。その理由として、次の3点が考えられる。第1に、日系アメリカ人の社会的地位確立により、日系であることに自信を持つ余裕が出来たこと。第2に、日本経済の発展やアニメなどポップカルチャーの流行により、ルーツである日本を誇りに思えるようになったこと。第3に、日本とのつながりの希薄化、外婚の増加などにより、日系アメリカ人という立場が曖昧になってきていることである。

彼らの親である3世は、1、2世と比べて周りからの差別意識は明らかに少ないが、成長過程で少なくともなんらかの形で「日本人の血」を恥じる経験をしている（竹沢

1993)。それに対して、4世であるクリスやエイミーからは恥じるといった感情が全く見えてこなかった。それは3世がアメリカ化し、「モデルマイノリティ」といわれるまでに社会的地位が確立したことがひとつの要因であろう。これは2世と3世との比較の際にも言及されている。竹沢（1994）によると、多くの1, 2世はアメリカ社会に受け入れられるために、人一倍努力した。その結果、戦後に著しい社会成長を遂げ、アメリカ社会からも受容されると、かつてのような同化を切望する必要性が薄れたとし、それにより彼らの過去の経験を再吟味する余裕を得たと分析している。これは4世においてさらに顕著にみられる現象といえる。差別を受けたこともなく、社会的地位の確立により、日本人の血を隠す必要がなくなった今だからこそ、自分のルーツについて考える余裕が生まれたといえるであろう。クリスとエイミーに対するインタビューでも、終始彼らは日系アメリカ人であることを誇りに感じているように思えた。

また、来日経験のなかったクリスの両親が、日本で働く息子（クリスの兄）を訪ねてクリスと日本へ行き、その後、父親が日本語を勉強し始めるという出来事があった。日本に住む長男、日本語学習に励む次男である、子（4世）から親（3世）への影響が観察されたことも興味深い点である。

5. 4 日系アメリカ人のアジア系アメリカ人化

最後に、アジア系アメリカ人化について触れている2人の語りの部分を取り上げる。

アジア系としての意識はすでに3世の代に始まっているが、その意識の高まりは加速の一途を辿っているといっていいただろう。その要因として、次の2点が考えられる。飯野（2000）が指摘する、日系アメリカ人の結婚相手の大半がアジア系であるという状況を前提とすると、第1に、「血」の問題である。外婚が進むことにより日系以外のアジア系の血を生まれながらに持ち合わせることによるアジア系アメリカ人化である。第2に、「意識」の問題である。1960年代のイエロー・パワー²運動から始まったアジア系としての連帯が、今日では日常レベルでも見受けられ、中国系や日系といった個別のアイデンティティよりも「没エスニシティ」（森茂 1999）という意識的な部分があるといえる。さらに、これらには相関性があると考えられる。この点についてクリスは以下のように語った。

「友達の多くは中国系アメリカ人だから、日系以外と結婚する可能性が高い。そうしたら自分の子供はもう日系ではなくなる。それはちょっと悲しい。一方で、諦めの気持

² ブラック・パワー運動に触発されて始まった、アジア系による政治活動。

ちも大きい。次の世代はどうなっていくのか、純粋に興味がある。移民の歴史が長い白人が、もともとイギリス系、ドイツ系などの違いがあったのに徐々に混ざり合い、まとめて白人とされるようになったように今後、日系としてではなくアジア系としての意識が強くなっていくだろう。それはいいことでもあると思う。」

(クリス：2009年10月より)

外婚が進み、日系アメリカ人が自分の世代で終わる可能性を認め、悲しいという主観的な感情と、今後の展開について興味を持つといった客観的な感情を持ち合わせている。さらに、白人のケースと照らし合わせて分析する冷静な視点と、アジア系アメリカ人化に対する肯定的な意見も見られる。

そして、クリスもエイミーも、日本とのつながりが希薄化している状況で4世という立場の複雑さを感じ、日本語を通して日本文化や言語とつながろうとしている。

「1,2世がアメリカに順応しようとした結果、日本文化、日本語も次第に薄れ、自分やその友達にとって今、日系アメリカ人4世であるということはとても混乱することで、自分たちは何者なのか、明らかにすることがとても難しい時期に来ている。しかし、そういった中でアメリカ化する者もいれば日本語学習を通して再び文化や言語とつながろうとする日系アメリカ人もいる」

(クリス：2009年10月より)

「段々日系アメリカ人がいなくなっていくから、自分の文化や言語を知ることはいいことだと思う。」

(エイミー：2009年10月より)

親までの世代がアメリカへの同化に努めた結果、日本とのつながりが薄れ、今、日系人であることは4世にとって「混乱すること」であり、「自分は何者なのか」彼らはその探求をしている。中にはアメリカ人、もしくはアジア系としてのエスニック・アイデンティティを強く持つ者もいる。そしてまたクリスやエイミーのように、自分のルーツに関心を抱く者もいる。まさに混乱の時期であるといえる。

6 まとめ

今回取り上げた日系アメリカ人4世の2人から明らかになった事柄を、研究課題をもとにまとめた。

はじめに、周辺環境であるが、日本文化や日本語に触れる機会は、家庭内もしくは日系コミュニティ、サークル、日本語クラス等であり、それ以外の場では日本文化に触れ

る機会や日系人同士の強いつながりはないといえ、エスニック・グループを超えた幅広い交流が行われているといえる。また、エスニック・アイデンティティに関しては、世代交代、日本とのつながりの希薄化などによる日系人としての立場の曖昧さ、アジア系アメリカ人化を実感していることが明らかとなった。

ここで注意したいのが、アジア系アメリカ人化とは、決して「日系→アジア系」といった一直線上の一方通行の変化ではないということである。「血」の面でも意識の面でも確かによりアジア系としてのまとまりが強くなる傾向にあるとはいえる。しかし、彼らは様々な社会的文脈の中で、時に日系アメリカ人、また時にアジア系アメリカ人であると意識するなど、時と場合に応じた複数のエスニック・アイデンティティを持ち合わせているのだ。また、何かのきっかけ、例えばクリスの場合、日本語学習を機に日系人としてのエスニック・アイデンティティを強く意識するといったような、新たなアイデンティティの構築という可能性をも含んでいるといえる。

そして文化や言語の面でも、決して消滅の一途を辿っているわけではない。確かに、日本文化や日本語の衰退は確認される。一方で、伝統行事の活性化に情熱を燃やす3世代や、クリスやエイミーのような日本語を学習する若い世代がいるように、新しい形で日本とのつながりが生まれているということも見逃してはならない。

次に、日本語学習とエスニック・アイデンティティとの関係について述べる。2人の場合、竹沢（1994）の指摘通り、日本とつながる手段、日本人の要素を補足する手段といった、日本語と日系人としてのエスニック・アイデンティティの密接な関係がみられた。また、日系ネットワークに属している場合はそこへの参加・維持といった実質的な目的としての要素も強いといえる。ここで注目したいのは、2人の語りから、日系コミュニティ等に属さず、日本とのつながりが比較的弱いクリスの方が、エイミーよりも日本への憧れを強く抱いている傾向にある点である。林（2003）は、在独トルコ系移民の2世の意識調査で、トルコとのつながりが弱い話し手の方がトルコ語に対する強いこだわりを示したことから、ドイツ社会への順応が進みトルコとのつながりが薄れることがかえってトルコ語への関心を喚起したと分析している。同様に、日系人同士のつながりが希薄化しているとより強く感じているクリスの方が、日系のネットワークに属するエイミーよりも、日本への想いや日系人としてのエスニック・アイデンティティを強く意識する傾向にあると考えられる。

さらに、日本語学習を通じた周辺環境やアイデンティティの変化について述べる。日本語を学習することによって日本文化や日本人との交流の機会が増え、結果、日系人としてのエスニック・アイデンティティが構築される。それにより日本語学習意欲が高まり、日本に関するネットワークへの参加が盛んになり、さらにエスニック・アイデンティ

ティが構築されるといった相互作用が見られた。また、アケミ・キクムラ（2002）で指摘されているように、新1世が既存のコミュニティの活性化に寄与しており、4世に日本語、日本文化などの点で影響を与えているといえる。

以上のように、日系人としての立場が曖昧になり、アジア系としての連帯意識が強まるなか、日本語学習を通して自分のルーツを模索している様子が伺えた。2人の語りから、4世以降「混血」が増え、意識の多様化が見られる中、既存のエスニック・アイデンティティや人種の枠内で日系アメリカ人を定義することは難しい状況になっているといえよう。つまり、持ち合わせている行動様式や「血」、使用言語などで区別し、理解しようというのではなく、重要なのはどういったネットワークに身を置き、自分を何者と捉え、理解するかという意識の部分にあるといえる。

本研究のストーリー自体は極めて個人的であり、人数も量的調査と比べると2人と少なく全てを標準化、一般化することはできない。しかし、谷（2008）が「もし自分が聞きとらなかつたら、これらの言葉はずっと日常性のなかにもれたままただただろう（p.221）」というように、まだ研究や報告の少ない、ある2人の日系アメリカ人4世の今の複雑な思いや環境、エスニック・アイデンティティを、より彼らに近い視点から明らかにすることができたといえる。

今後の課題として、この分野において長期に渡った調査がないため、インタビューや参与観察を継続し、若い世代の日系アメリカ人のダイナミクス性に富んだ周辺環境やエスニック・アイデンティティの変化などを明らかにしていく。さらに、日本語学習経験のない若い世代の日系アメリカ人などにもインタビューを実施するなど、調査協力者数を増やすことで多様な実態を明らかにし、理解を深める。

参考文献

- アケミ・キクムラ＝ヤノ（2002）『アメリカ大陸日系人百科事典』明石書店
 綾部恒雄（1982）『アメリカ民族文化の研究』弘文堂
 飯野正子（1996）「日系人にとっての戦後50年」『アメリカ研究』30,19-30
 飯野正子（2000）『もう一つの日米関係史』有斐閣
 江淵一公（2002）『バイカルチュラリズムの研究：異文化適応の比較民族誌』九州大学出版会
 カーティス・タカダ・ルークス 他（2004）『アジア系アメリカ人の多様性：連帯に向けて』日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム報告書
 桜井厚（2002）『インタビューの社会学ーライフストーリーの聞き方』せりか書房
 竹沢泰子（1993）「日系アメリカ人におけるエスニシティ再生とアメリカ化」『アメリカ

研究』27, 171-188

竹沢泰子 (1994) 『日系アメリカ人のエスニシティー強制収容と補償運動による変遷』
東京大学出版会

谷富夫 (2008) 『ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社、221

林徹 (2003) 「二つの祖国」『言語』32, 36-42

彦坂佳宣 (1997) 「日系アメリカ人の言語的状況とエスニシティ」『立命館言語文化研究』
8, 3-45

森茂岳雄 (1999) 『多文化社会アメリカにおける国民統合と日系人学習』明石書店

山本耕二 (1995) 『戦争と日系アメリカ人』草の根出版会

羅曉勤 (2005) 「台湾高等教育における日本語学習者の学習動機 —社会的文脈と自己
形成の関連から—」博士論文 大阪大学

Kinginger, C. (2004) 'Alice doesn't live here anymore: Foreign language learning and
identity reconstruction.' In A. Pavlenko, A. & Blackledge (Eds.) *Negotiation of
identities in multilingual contexts*. Clevedon: Multilingual Matters.

Takaki, R. (1990) 'Sansei male personhood, corporate sexuality and Ms. Madeline
Girbaud: An essay in the hermeneutics of management.' *The Journal of Ethnic
Studies*, Vol.17, No.1, 1-52.